# 毎日新聞

## 【2012年5月25日付】

日　新　聞　2012年(平成24年)5月25日(金)　神奈川　22

# 広がるエコ半紙

## 全国初リサイクル　環境教育にも一役

### 振興会

県内の書道関係者でつくる「エコ再生紙振興会」（横浜市神奈川区）は、使用済みの半紙「反古紙（ほご）」のリサイクルに取り組んでいる。ごみの減量化につながるだけでなく、学校での環境教育にも一役買っている。同会は「横浜から全国にエコを発信したい」と意気込んでいる。【一條優太】

同会は昨年2月、学校の授業や書道教室で出る大量の反古紙が再利用されずに捨てられる現状を変えようと、県内の書道家らが設立した。同会によると、反古紙を再び半紙としてリサイクルするのは全国で初めての試みという。

同会の試算では、横浜市内の小中学校約490校で年間約40トン、2万人規模の公募展では約25トンの反古紙が出るという。

池田光希事務局長（45）は「あらゆるものの電子化が進んでも、紙に何度も書いて練習するという書道の基本はこれからも変わらない。エコが叫ばれる中、未来に書道を残していくためには、反古紙のリサイクルが必要だと考えた」と話す。

リサイクルは、県内の学校や書道教室から出た反古紙をエコバッグで収集するところから始まる。一定程度の量がまとまれば、静岡県富士市のパルプ工場に運び込む。

パルプ工場では、圧縮してブロック状にした半紙を水槽に投入し、墨の成分を抜く「脱墨」という作業を行う。その後、脱水とすすぎを繰り返すと、灰色の古紙パルプができる。同時に発生する「スラッジ」と呼ばれるかすは、路面材や猫のトイレの素材などに活用される。

古紙パルプは、製紙工場で通常のパルプと混ぜて再び引き伸ばされた後、乾燥、裁断などの工程を経て半紙として生まれ変わる。

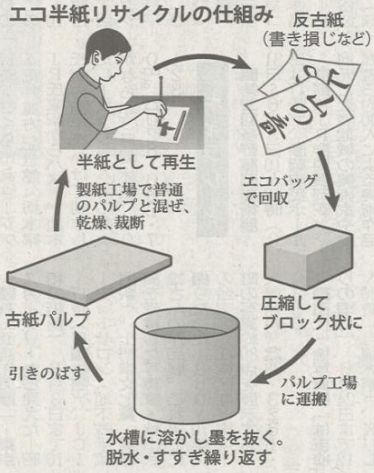
再生された「エコ半紙」は、小学校の授業で使うような通常の半紙に比べ3割ほど価格が高く、色もやや灰色がかっている。一方、厚みがあり、書き味が良いのが長所だ。使用後は、再びリサイクルできる。

「環境教育の一環として、横浜市教委は今年度、市内の全小学校でエコ再生紙振興会のエコバッグを使用し、反古紙の回収を進めている。また、大井町の小学校では書道の授業に同会の「エコ半紙」を使用している。

昨年度から先行して反古紙の回収を実施している横浜市立白幡小の佐藤正淳副校長は「児童に物の大切さを学んでもらえる良いきっかけになっている」と話す。

同会には県内外の教育委員会からも問い合わせが相次いでいるという。池田事務局長は「リサイクルの輪が広がれば、コスト面のハードルも下がる。将来は全国に取り組みを広げたい」と話す。

### エコ半紙リサイクルの仕組み



「エコ半紙」を使って書道に取り組む児童たち＝横浜市神奈川区の市立白幡小学校で

### かながわの書

題字は船本芳雲氏

### 特集ページで書を全面応援

書道のページ「かながわの書」は、原則として毎月最後の金曜日に掲載します。書の話題、書の作品評論、書道展の案内などを1ページ全体を使って展開する定期的な紙面です。毎日新聞横浜支局は神奈川県の書を全面的に応援するとともに、読者と書をつなぎます。【横浜支局長・山本修司】

本校は昨年度から習字の半紙のリサイクルに取り組んでいます。今までゴミとして捨てていた半紙（反古紙）が再び半紙となって戻ってきました。

ものを大切にする心の涵養につながっています。